



Title	副詞「まるで」が共起する述語について
Author(s)	朴, 秀娟
Citation	現代日本語研究. 2021, 13, p. 12-26
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/88319
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

副詞「まるで」が共起する述語について

Predicates Used with the Japanese Adverb *marude*

朴 秀娟

PARK Sooyun

キーワード：「まるで」、比況用法、非比況用法、述語のタイプ

要 旨

本稿は、副詞「まるで」が共起する述語の構文的特徴および意味的特徴について述べたものである。比況用法の「まるで」は、基本的に、「ようだ」「みたいだ」のような比況を表す形式を伴う語と共起し、非比況用法の「まるで」は、構文的には五つのタイプ、意味的には四つのタイプの述語と共起するということを述べた。そして、これらの述語の間には、構文的にも意味的にも連続性が見られるということを示した。また、明治期の「まるで」との比較も行い、現代の「まるで」は典型的な動作を表す動作動詞の否定形式とは共起しにくくなっているなど、「まるで」が共起する述語には一定の制限が出てきているということを指摘した。

1. はじめに

現代日本語における副詞「まるで」は、「ようだ」「みたいだ」のようなモダリティ形式と共起し、比況の用法で用いられることの多い副詞である（以下、比況用法とする）。

(1) 夜空の花火はまるで流れ星のようだ。

(2) この靴は履き心地がよくて、まるで雲の上を歩いているみたいだ。

しかし、次のように、比況ではない用法で用いられる「まるで」も少なからず見られる（以下、非比況用法とする）。これらの例における「まるで」は、「全然」や「全く」に置き換えて用いることも可能である。

(3) 前髪を切っただけなのに、雰囲気は {まるで／全然／全く} 違う。

(4) スポーツには、{まるで／全然／全く} 縁がない。

(5) 怒られている理由が私には {まるで／全然／全く} わからない。

しかし、「まるで」が共起する述語には、「全然」や「全く」には見られない、ある制限が見られる。(6)、(7)のような例では、「全然」や「まったく」に比べて、「まるで」の使用は不自然であるように思われる。

(6) ポチが {?まるで／全然／全く} 元気じゃない。

(7) 昨日はお酒を {?まるで／全然／全く} 飲まなかった。

ところが、明治期では、(6)のような、形容詞述語とは共起しにくいという制限は見られても、(7)のような、動作動詞とは共起しにくいという制限が必ずしも見られるわけではない。明治期には、現代日本語には見られない、(8)のような「まるで」が見られる。

(8) 「うちの母に逢ったかい」と甲野さんが聞く。「まだ逢わない。今日はこっちの玄関から、上ったから、日本間の方はまるで通らない」(夏目漱石『虞美人草』)

本稿では、このような、「まるで」が共起する述語の変化に注目し、「まるで」が共起する述語の構文的特徴および意味的特徴を記述することを目的とする。また、明治期の「まるで」が共起する述語との比較を通し、「まるで」が共起する述語には一定の制限が出てきていることを指摘する。

以下、まず、第2節では、「まるで」の用法および共起する述語に関する従来の指摘をまとめ、第3節では、本研究で用いた調査資料を示す。第4節では、「まるで」が共起する述語の構文的特徴および意味的特徴について記述する。続く第5節では、明治期における「まるで」について述べ、現代の「まるで」との違いについて指摘する。第6節では、本稿のまとめを行う。

2. 「まるで」の用法および共起する述語に関する従来の記述

「まるで」の用法について、森田(1989)、飛田・浅田(1994)、グループ・ジャマシイ編(1998)などの従来の記述では、その多くが、比況を表す場合と完全否定を表す場合とに大きく二分類している。後者は、「完全に」または「全然」「全く」に近い意味を持つ。これらのような、用法の説明を主とする記述においては、基本的に、比況を表す「まるで」については、「ようだ」「みたいだ」

を伴う例が、完全否定を表す「まるで」については、否定形式や否定的な意味を有する語と共起している例が提示されているだけで、(6)、(7)に見られるような制限については特に触れられていない。

一方、小矢野(1995)、朴(2016)では、完全否定を表す「まるで」を中心に、共起する述語のタイプについて、より詳細な記述が見られる。小矢野(1995)は、「まるで」がもつ程度副詞性について論じたものであるが、「まるで」が共起する述語を、①動作性概念の動詞の否定形、②否定の形容詞「ない」を含む連語、③否定概念を含む単語の肯定形、④異同関係概念を含む単語、⑤否定概念を含まない単語の肯定形の五つに分けている。しかし、それぞれの述語と共起する「まるで」の意味や機能に関する記述が中心となっており、現代日本語における「まるで」が共起する述語に見られる制限についてまでは言及されていない。小矢野(1995)で挙げられている「①動作性概念の動詞の否定形」には、明治期と現代とでは違いが見られる。

朴(2016)は、完全否定を表す副詞として、「まるで」「全然」「全く」の三つを取り上げ、これらの副詞が共起する述語のタイプの共通点と相違点について述べたものである。その中で、(6)、(7)のような、「まるで」が共起する述語に見られる制限についても言及しているものの、小矢野(1995)と同様に、明治期との具体的な違いについてまでは論じていない。

本稿では、これまでの記述を踏まえつつ、「まるで」が共起する述語に見られる変化に注目し、「まるで」が共起する述語に見られる制限、さらには、それらにおける意味的特徴について述べていく。

3. 調査資料について

本稿では、現代、明治期、それぞれについて、次に示す資料からデータを収集し分析を行った。なお、本稿でいう「現代日本語」とは、便宜的に1950年以降の日本語を指す¹⁾。「現代日本語書き言葉均衡コーパス」の場合、出版年として表示されている年が必ずしもその出版物の初出年であるとは限らない。考察対象を1950年以降の日本語に絞るために、便宜的に、作家、または翻訳者の出生年が1940年以降である出版物に現れた「まるで」のみを考察対象とした。

[現代 (1950 年～)]

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(国立国語研究所)のうち、「図書館・書籍」コーパス²⁾

[明治期]

- ・『CD-ROM 版 新潮文庫 明治の文豪』(新潮社より 1997 年に刊行)³⁾
- ・『国立国語研究所資料集 15 太陽コーパス—雑誌『太陽』日本語データベース』(国立国語研究所編, 博文館新社より 2005 に刊行)

考察対象となったのは、現代の用例で 2016 例、明治期の用例で 1137 例である⁴⁾。以下、現代と明治期とに分けて、考察結果を述べる。

4. 現代の「まるで」が共起する述語

現代の「まるで」が共起する述語を比況用法と非比況用法とに分けると、その分布は次の表 1 のようになる。

表 1 : 現代における「まるで」の用例分布

比況	非比況	合計
1603 (79.5%)	413 (20.5%)	2016 (100%)

約 8 割が比況用法で用いられているものであり、現代の場合、「まるで」は、比況用法で用いられることの多い副詞であることが分かる。これは、5 節で述べる明治期の分布と大きな違いである。以下、用法ごとに、共起する述語のタイプについて述べていく⁵⁾。

4. 1. 比況用法の場合

比況用法の「まるで」は、「ようだ」「みたいだ」を伴っていることが多い。

(9) 見渡す限りすべての岩山が、同じ横縞で彩られているのだ。まるで、巨大な木彫に浮き出た年輪のようだ。全体の色は、雨につやつやと濡れ光る深紅色で、その上を太くて黒い帯が何本も横断している。(貴志祐介『クリムゾンの迷宮』)

(10) そのとき、ズボンの左のポケットのなかで、なにかがびくんっと動いた。手を入れると、ジャックがくれた石ころがあった。石はあたたかく、手のなかでかすかに脈うっている。まるで、小さな生きものの心臓の鼓動みたいだ。(戸井十月『カチーナの石』)

「ようだ」「みたいだ」以外にも、次のような形式と共起していても、比況用法となる。

(11) 頭の片隅の方では、もう帰らなくちゃ、もう帰らなくちゃ、という声が鳴り続けているのだけれど、わたしの指と本の表紙とは、まるでアロンアルファでくっつけられたかのごとく離れなくなってしまい、わたしは口を半開きにしたままページを繰り返した。(鷺沢萌『町へ出よ、キスをしよう』)

(12) イシュトヴァーンがいかにおそれられているかを知らせるかのように、まるであのカナンの伝説、大地を二つに割いて走ったドールの津波さながらに、イシュトヴァーン隊をみとめたとたんにクム軍の後衛がそれを避けて二つに左右にあとずさってゆく。(栗本薫『野望の序曲』)

(13) 輪転機の置いてある印刷工場の中二階には工員用の休憩室が設けられていた。休憩室と言っても十畳あまりの畳敷きの部屋で、しかも壁はしみだらけ畳はささくれだって天井からつるした裸電球が一つだけ明かりをともしている光景は、まるで木賃宿の屋根裏部屋か建設現場の飯場という感じだった。(杉山隆男『メディアの興亡』)

また、(14)、(15)のように、比況を表す述語形式を伴わずに、名詞述語と共起し比況を表す場合もある。(14)は、「あれではまるで、{間抜けな泥棒のようだ/間抜けな泥棒みたいだ}」、(15)は、「それじゃまるで、{パブロフの犬のようだ/パブロフの犬みたいだ}」のように、「ようだ」や「みたいだ」で補っても差し支えない。ただし、名詞述語と共起している例がすべて比況用法になるわけではないため⁶⁾、名詞述語と共起する「まるで」が比況用法であるかどうかは、前後のコンテクストによる。

(14) 父親の健次は土で汚れたスニーカーを履き、大きな躰を窮屈そうにツナギの作業服で包んで、頭から白いタオルを被っている。あれではまるで、間抜けな泥棒だ。ダサイことこのうえない。(伊島りすと『ジュリエ

ット』)

- (15) 「この人達は何の動機もなく一日何回か戦い合うわけですか、大野さん?」「そうでしょ、音楽が流れ出したらとりあえず戦うと」「それじゃまるで、パブロフの犬だ」(大槻ケンヂ『行きそで行かないとこへ行こう』)

4. 2. 非比況用法の場合

非比況用法の「まるで」が共起する述語は、大きく、次の五つのタイプに分けることができる⁷⁾。

- Aタイプ 「同じだ」「そっくりだ」など：＜同一＞を表す述語
- Bタイプ 「違う」「異なる」など：＜異なり＞を表す述語
- Cタイプ 「無縁だ」「駄目だ」など：＜欠如＞を表す述語
- Dタイプ 形容詞相当の否定形式「～がない」：＜欠如・打消＞を表す述語
- Eタイプ 動詞の否定形式：＜打消＞を表す述語

以下、具体例を挙げつつ、構文的特徴および意味的特徴について述べていく。

4. 2. 1. Aタイプ「同じだ」「そっくりだ」など：＜同一＞を表す述語

「まるで」が「同じだ」「そっくりだ」など、語彙的に＜同一＞を表す述語と共起すると、非比況用法となる。語彙的に、二つのものごと間に見られる類似性を示すという点で比況用法に近い。比況用法の場合、述語で示されているものは例えであり、その例えの提示を通して互いの性質の似通いを示す。一方、「同じだ」「そっくりだ」のようなく＜同一＞を表す述語と共起する場合、例えを提示しているというよりも、両者の関係そのものを示しているという点で、比況用法とは異なる。Aタイプの述語は、比況用法と、次に示すBタイプの述語との間をつなぐものとして働く。

- (16) 車で通った野田の商店街は、暮をひかえて、それでもいつもより賑わいを見せていた。その賑わいも、まるで私の心の内なる賑わいと同じだ、と感じていたものだ。(望月照彦『都市民俗学』)

- (17) 一方の力づくの政治とは、これとは全く異なっている。言うことも義政とは逆方向、やることも義政とは正反対である。まるでそれは、逆向きに走り出すのとそっくりである。(浅野裕一『墨子』)

4. 2. 2. **Bタイプ**「違う」「異なる」など：＜異なり＞を表す述語

「まるで」は、「違う」「異なる」「反対だ」といった、語彙的に＜異なり＞を表す述語とも共起する。二つのものごと間の関係を表しているという点ではなく同一＞を表す「まるで」と共通しているが、Bタイプの述語の場合、類似性ではなく異なりを示すという点で異なる。

(18) 建物の中には美容室もあり、また三台くらい、パチンコ台が並んでいた。大使館関係の外国人が利用するこの場所を見たら、北朝鮮の人々はきっと死ぬほど驚くだろう。それくらい、外の世界とはまるで違うのだ。(雨宮処凛『悪の枢軸を訪ねて』)

(19) 顔を初めてちゃんと視たが、雄山閣の社長や重子さんから聞いていた印象とまるで異なっている。もっと年配の人かと思っていたのに…、目の前の明石さんはどう視ても四十歳前後にしか視えない。(明石散人『七つの金印 日本史アンダーワールド』)

(20) しかも、男たちがどうしても納得できないのは、家事をしないといわれても、べつに怠けてしないわけではなく、むしろまるで反対だからなのだ。多くの男たちは独身時代から一生懸命に働き続けてきた。(山口宏『うかつな男としたたかな女の法律講座』)

4. 2. 3. **Cタイプ**「無縁だ」「駄目だ」など：＜欠如＞を表す述語

「まるで」は、「無縁だ」「無反応だ」「駄目だ」など、語彙的に＜欠如＞を示す述語とも共起する。

(21) 少年野球の地区連盟会長や町内会副会長を務める北川にとっても、朝鮮学校は目と鼻の先にありながら、まるで無縁の存在だったという。(野村進『コリアン世界の旅』)

(22) 数十人の団体はホステスとも話さず黙々と飲んでいるだけで、ショパンのギャグにまるで無反応だった。(吉川潮『わが愛しの芸人たち』)

(23) ロッテ時代は何度もチャンスをつかめずに、新聞記事になった記憶などほとんどない。守備、走塁はまるでダメだが、ツボにはまればスタンドに放り込む長打力が、当時の田淵幸一軍チーフ打撃コーチの目に止まった。(伊村雅央・池田浩明『背番号三桁 僕達も胴上げに参加してい

いんですか?』)

4. 2. 4. **Dタイプ** 形容詞相当の否定形式「～がない」: <欠如・打消>を表す述語

「まるで」は、「～がない」とも共起する。語彙的には、<欠如・打消>を表す。(25), (26)は、それぞれ「見える現実以外にはまるで無関心なのだ」「プールに沈んだ男の蒼黒い顔は、まるで無表情だ」といった形にすることも可能であり、意味的にCタイプと連続している。

(24) このところ食欲がまるでなく、好物を食べても砂を噛むように味けない。(香取章子『ペットロス』)

(25) 親爺殿は目に見えるものしか頭がないから、物思いに耽ったりはしない。見える現実以外にはまるで関心がないのだ。(塩川治子『北斎の娘』)

(26) プールに沈んだ男の蒼黒い顔には、まるで表情がない。(服部真澄『龍の契り』)

「まるで」が共起する述語は、「～がない」に限定され、形容詞そのものの否定形式とは共起しにくいというのが特徴的である⁸⁾。今回収集した現代の例、2016例のうち、形容詞の否定形式と共起している「まるで」は、以下の1例のみであった。形容詞そのものの否定形式とも共起しやすい「全然」や「全く」とは対照的である。

(27) 実は、喧嘩とゲバルト、ゴミ収集に明け暮れていた学生時代、ふだんの暮らしとはまるで似つかわしくない道具を持っていた。(北方謙三『風待ちの港で』)

4. 2. 5. **Eタイプ** 動詞の否定形式: <打消>を表す述語

「まるで」が共起する動詞の否定形式の約6割は、「わからない、知らない、見えない、聞かない、感じない」のような、認識活動を表す動詞である⁹⁾。語彙的には、<打消>を表す。

(28) 金の話とは別に、これでは誰が信用できる人間なのか、まるでわからない。(大沢在昌『夢の島』)

(29) ピザの台だとかソースだとかをお店で売っているなどということはま

るで知らなかったのだ。(柴田よしき『少女達がいた街』)

(30) 舞台に立ったとたん、集まった光のまばゆさにかつと目がくらんだ。

客席がまるで見えない。(令丈ヒロ子『わらいの王子様』)

(31) 彼の作品に記憶はないし、いまはまるで名前を聞かない。(藤原伊織『ひまわりの祝祭』)

(32) 旅に出て6年。意外なものだが、自分ではその長さをまるで感じない。

(石田ゆうすけ『行かずに死ねるか！ 世界9万5000km 自転車ひとり旅』)

認識活動を表す動詞以外のものは(33)、(34)のように、「似合わない」、「向かない」のような状態性の動詞や、(35)のような、動詞の可能形の否定形式であって、具体的な動作を表す動作動詞の否定形式とは共起しにくい¹⁰⁾。

(33) 当然、私にまわってきた衣裳は最悪のものだった。裾はつんつるてんで、首のところもまるで似合わなかった。(キャサリン・ヘプバーン(芝山幹郎(訳))『Me キャサリン・ヘプバーン自伝』)

(34) もともと、ルマンジタのような遊牧民族の逗留地は運搬の容易さを第一義としてするため、戦いにはまるで向かない。(三田誠『砂漠の王』)

(35) 彼らは、専門的な経済問題についてならまだしも、日本の文化や家庭生活について聞かれると、まるで満足に答えられないのだ。(秋島百合子『アナウンサーはなぜ消えたのか イギリス式テレビ制作術』)

5. 明治期の「まるで」が共起する述語

明治期の「まるで」には、その用いられ方において、現代とは異なる特徴が見られる。明治期における「まるで」の用例分布を表にすると、次の表2のようになる¹¹⁾。

表2：明治期における「まるで」の用例分布

比況	非比況	合計
371 (32.6%)	766 (67.4%)	1137 (100%)

比況用法が圧倒的に多かった現代とは異なり、明治期の場合、非比況用法の

「まるで」の方が多い。現代と明治期とで、比況用法、非比況用法が占める率が逆転することについては朴(2016)でも指摘されているが、それに加えて、現代と明治期とでは、非比況用法の「まるで」が共起する述語を中心に、次のような、異なる特徴が見られる。

まず、明治期には、現代には見られない、一回的な具体的な動作を表す動詞の否定形式と共起する「まるで」が見られる。

(36)「うちの母に逢ったかい」と甲野さんが聞く。「まだ逢わない。今日はこっちの玄関から、上ったから、日本間の方はまるで通らない」(夏目漱石『虞美人草』)(例(8)を再掲)

(37)肴は長浜の女が盤台を頭の上に載せて売りに来るのであるが、まだ小鯛を一度しか買わない。野菜が旨いというので、胡瓜や茄子ばかり食っている。酒はまるで呑まない。(森鷗外『鶏』)

次に、現代の場合、非比況用法の「まるで」が共起する述語は、大きくA～Eタイプの五つであったが、明治期の場合、A～Eタイプのいずれにも該当しない、次のような「まるで」が少なからず見られる。

(38)「隣りに乗ってるとは僕も知らなかった。——どうも善く逢うね」「少し逢い過ぎるよ。——このハムはまるで膏ばかりだ。君のも同様かい」「まあ似たもんだ。君と僕の違位な所かな」と宗近君は肉刺を逆にして大きな切身を口へ突き込む。(夏目漱石『虞美人草』)

(39)『私のは十八九から禿げ初して二十七八の時は全で禿願になりましたがナ、禿頭病が流行してから三四度警察官の注意を受けますんで飛んだ迷惑をします。』(内田魯庵『投機』)

(38)、(39)のいずれも、比況用法で用いられている「まるで」でないことは明らかであるが、「まるで」が共起する述語の構文的特徴および意味的特徴は、現代において非比況用法の「まるで」が共起する述語とも異なる。水谷(1995)は、「まるで」の用法として次の三つを認め、一見、関係のないように見える1と2の用法をつなぐものを0とする(記号および表現は、水谷1995のママ)。水谷(1995)では、0を「まるで」の原義としているが、(38)、(39)の「まるで」も、「まるで」本来の意味として用いられているものと見ることができそうである。

- 0 全く。すっかり。
- 1 (ア)《あとに打消しを伴って》全面的な否定を表す。全然。
- 2 (イ)《あとに「(かの) ようだ」「みたい」「同様」などの表現を伴って》(全体的に言って) ちょうど。

しかし、比況用法、非比況用法とは別個に用法を立て、構文的特徴や意味的特徴を論じるには、まだ十分な検証ができていない。ここでは、現代では用いられない例として挙げておくのに留めておく。なお、明治期においても、A～Eタイプの述語はすべて見られる。また、形容詞の否定形式と共起した例は、明治期においてもほぼ見られなかった¹²⁾。

以上のことから、明治期における非比況用法の「まるで」は、共起する述語の範囲が広く、現代に比べると制限が緩やかであることが分かる。現代日本語における「まるで」は比況用法で用いられることが多くなり、非比況用法として用いられる「まるで」は、使用、述語のタイプいずれにおいても限定されてきていることが指摘できる。

6. おわりに

本稿では、「まるで」が共起する述語に見られる構文的特徴および意味的特徴について述べ、現代と明治期の「まるで」が共起する述語に見られる違いについて論じた。まず、現代の「まるで」が共起する述語の特徴をまとめると、次項に挙げる表3のようになる。表3に示すように、非比況を表す「まるで」が共起する述語は、構文的には大きく五つのタイプに、意味的には四つのタイプに分けることができる。また、「まるで」が共起する述語には、意味的に、次のような連続性が見られる。まず、Aタイプの述語は、語彙的に<同一>であることを表し、二つのものごと間における類似性を示すという点で、「ようだ」「みたいだ」などと共起する比況用法に近い。次に、Bタイプの述語は、語彙的に<異なり>を表すものであるが、二つのものごと間の関係性を示しているという点で比況やAタイプと共通している。同時に、<異なり> = 「<同一>ではない」ということを表す点で、<欠如>や<打消>を表すCタイプ、Dタイプ、

Eタイプに連続する。そして、構文的には、Dタイプ、Eタイプの否定形式の述語は、「～がない」という形容詞相当述語と、動詞述語に限られるという特徴がある。ただし、動詞述語の場合も、典型的な動作を表す動詞とはほとんど共起せず、「わからない、似合わない、できない」のような状態的な意味の動詞である。

表3：現代の「まるで」が共起する述語の特徴

述語 用法	構文的特徴	意味的特徴
比況	「ようだ」「みたいだ」のような比況を表す形式を伴う語	<同一>
非比況	A 「同じだ」「そっくりだ」など	
	B 「違う」「異なる」など	<異なり>
	C 「無縁だ」「駄目だ」など	<欠如>
	D 形容詞相当の否定形式：「～がない」に限定	<欠如・打消>
	E 動詞の否定形式 E-1) 認識活動を表す動詞： 「わからない」「見えない」「感じない」など E-2) 認識活動を表す動詞以外： 「似合わない」「できない」など (典型的な動作を表す動詞とは共起しにくい)	<打消>

「まるで」は、明治期に比べて、現代では、非比況用法よりも比況用法で用いられることが多くなっている。そして、非比況用法でも、「まるで」は典型的な動作を表す動詞との共起がなくなっており、状態性の動詞や述語との共起に限定されてきている。比況用法が例えとして様子を表すとすれば、それと並行して非比況用法の述語も状態性の述語に限定されてきていると言えるかもしれない。この点に関する考察は、今後の課題としたい。

注

- 1) 明治期以降の日本語を指して「現代日本語」とすることもあるが、「まるで」の使用には、明治期と現在とでは違いが見られる。本稿では、明治期との比較考察を行うために、便宜的に、1950年以降の日本語を「現代日本語」とし、分析を行う。
- 2) 検索アプリケーションは、「中納言」を使用した。文字列検索を用いて、「まるで」、「丸で」、「マルデ」、「全で」を検索し、出てきたもの全てについて目視で確認を行い、副詞として用いられている「まるで」のみを考察対象とした。
- 3) 初出年が大正期にかかる作品を一部含んでいる。
- 4) 次のような、修飾先が不明であったものは除いた数である。現代の3例が考察の対象外となった。
 - ・彼女は壺を開けると、細長い棒を取り出して、ストローというには大きすぎる筒の中にセットした。それはまるで一、「…な、何してるの?」「吹き矢です」真面目な顔で言われる。(あすか正太『恋する国家権力：総理大臣のえる!』)
- 5) 本稿では、記述の便宜上、「まるで」が共起する「述語」としているが、考察対象には、「花火がまるで流れ星のように見える」「私にはまるで縁のない話」のような、連用修飾や連体修飾として機能しているものと共起している「まるで」も含まれる。
- 6) 次のような場合、名詞述語であっても、「まるで{嘘のようだ／嘘みたいだ}」とは言えないことから分かるように、「まるで」が比況を表しているとは言いがたい。このような例は、後述するAタイプの述語と共起する非比況用法となる。
 - ・「先日、ここでさっきと同じように地形の写真を見ていて、地球の表面の形というのは全部何か降ってきて、それが積もってできたんじゃないかって気がした。いや、地質学の常識から言えばまるで嘘だ。(池澤夏樹『スタイル・ライフ』)
- 7) 朴(2016)でも、部分的に、共起する述語の意味的特徴に基づいた記述が見られるが、本稿で示す意味的特徴とは性格が異なるものである。朴(2016)の

場合、「まるで」「全然」「全く」の三つの副詞に対して説明が可能なものとするべく、工藤(2000:115)において提示されている語彙的否定形式のタイプに基づいて、意味的特徴を示している。本稿では、「まるで」が共起する述語のタイプの間に見られる連続性を考慮した記述を行うために、語彙的否定形式のタイプに当てはめるのではなく、述語に見られる意味的特徴そのものに注目した。朴(2016)と本稿とで、述語の意味的特徴を示す用語に違いがあるのはそのためである。

- 8) ここでは、使用頻度が非常に低かったことから、「共起しにくい」としたが、ある条件のもとでは共起が可能な場合もありそうである。今回の調査資料には出てこなかったが、検索エンジンを用いて、「まるで怖くない」「まるで幸せじゃない」のような例を検索すると、使用例がヒットする。コンテキストや形容詞のタイプによっては、容認度が上がることもあるかもしれない。この点については、今回、考察することができなかった。今後の課題とする。
- 9) 本稿でいう「認識活動を表す動詞」とは、感性的な経験を示す動詞、思考活動を示す動詞、発見を示す動詞を指す(奥田 1983:92-112 を参照した)。小矢野(1995)においても、動詞の否定形式の例として挙げられている例の7割(17例のうち12例)は、「認識活動を表す動詞」の否定形式である。
- 10) 次のような、一見、具体的な動作を表しているようにも見える例が1例見られたが、反復的な習慣を表しており、状態的である。
 - ・なにしろ、このリシュヴァーン將軍の無口、というのは、度を越していた。本当に、まるで何もしゃべらない。(ひかわ玲子『水晶の谷を越えて』)朴(2016)でも指摘されているが、小矢野(1995)に挙げられている例のうち、動作動詞と共起している「まるで」の例は、大正期の作品からの例であるか、この例と同様に、反復的な習慣を表している例である。
- 11) 朴(2016)でも同様の資料からデータを収集して考察を行っているが、考察対象としたデータの総数の違いにより、数に若干のずれがある。それぞれの用法が占める比率はほぼ変わらない。
- 12) 以下のような「まるで」が1例見られただけで、形容詞そのものの否定形式と共起している「まるで」は1例も見られなかった。

- ・けれども今夜に限って彼は神田で電車を降りた事も、牛肉屋へ上った事も、無理に酒を呑んだ事も、まるで話したくなかった。(夏目漱石『門』)

引用文献

- 奥田靖雄(1983)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房, pp. 21-279.
- 工藤真由美(2000)「否定の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店, pp. 93-150.
- グループ・ジャマシイ編(1998)『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版
- 小矢野哲夫(1995)「程度副詞としての『まるで』」『日本語・日本文化研究』5, 大阪外国語大学日本語講座, pp. 1-14.
- 朴秀娟(2016)「完全否定を表す副詞『まるで』『ぜんぜん』『まったく』に関する一考察」『神戸大学留学生センター紀要』22, 神戸大学留学生センター, pp. 41-57.
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 水谷静夫(1995)「『まるで』攷」『計量国語学』20-3, 計量国語学会, pp. 99-111.
- 森田良行(1989)『基礎日本語辞典』角川書店

付記

本稿は、日本語学会 2010 年度秋季大会(於愛知大学)で行った発表である「副詞『まるで』が共起する述語についての一考察—非比況の用法を中心に」での論点を発展させたものである。

(神戸大学講師)